

「小長假」

中国は2008年から法定祝祭日を調整し、あらたに清明・端午・中秋の三つの伝統的祝日を休日にした。具体的には、元日（一日）、春節（三日）、清明節（一日）、労働節（メーデー、これまでの三日を一日に短縮）、端午節（一日）、中秋節（一日）、国慶節（三日）の十一日となる。同時にこれまで同様、それぞれの前後の土・日曜日を動かして連休にすることができる。国務院は2008年末に、二〇〇九年度の休日を決めて公表した。

それによると、春節は七日間、国慶節は中秋節（十月三日）と合わせて八日間の連休となり、元日・清明節・労働節・端午節はそれぞれ三連休になる。

庶民は春節と国慶節の休暇を「黄金週（ゴールデンウィーク）」、三連休を「小長假（少し長い休日）」と呼ぶ。一九九九年から一2008年までは、メーデーを含めて「黄金週」が三回あったのだが、2008年からは二回に減った半面、「小長假」つまり三連休が四回ないし五回できたことになる。

この点について国務院の関係責任者は、次のように解説している。一、民族の伝統的祝日を法定休日にするのは、国民、特に若者が伝統的祝日の存在を知り、伝統文化を感じ取る上で有意義である。二、休日が分散するのはそれ自体合理的であるとともに、大勢が一度に旅行するのを避けられ、交通手段や宿泊施設の緩和にもつながる。

2008年の初めての「小長假」は、おおむね好評だったようだが、一部に「三日間では中途半端で、結局なにもできぬまま終わった」などの不満も聞かれた。

日本でも、成人の日や体育の日などの「国民の祝日」を月曜日に設定して三連休を増やしているが、内需拡大が一つのねらいとされる。

おりしも世界的な経済変動に対処するため、中国は内需拡大にいつそう力を入れはじめており、それに「小長假」がどの程度役立つのか、注目される。

振り返ってみると、中国は一九九五年まで、土曜日は平常どおり出勤し、法定休日も七日しかなかった。「（一週間たまった家事や雑用に追われて）戦いの日曜日、クタクタの月曜日」などと揶揄されたものだ。それが週休二日制になり、法定休日が増えたうえ、「带薪休假」つまり有給休暇の制度もできたので、働く者にとってはずいぶん楽になり、友だちとの付き合いや読書による充電などの時間がとれるようになった。

ただ、農民はこのような「恩典」がないので、都市住民との格差が、自由な時間という面でも広がったことは否めない。